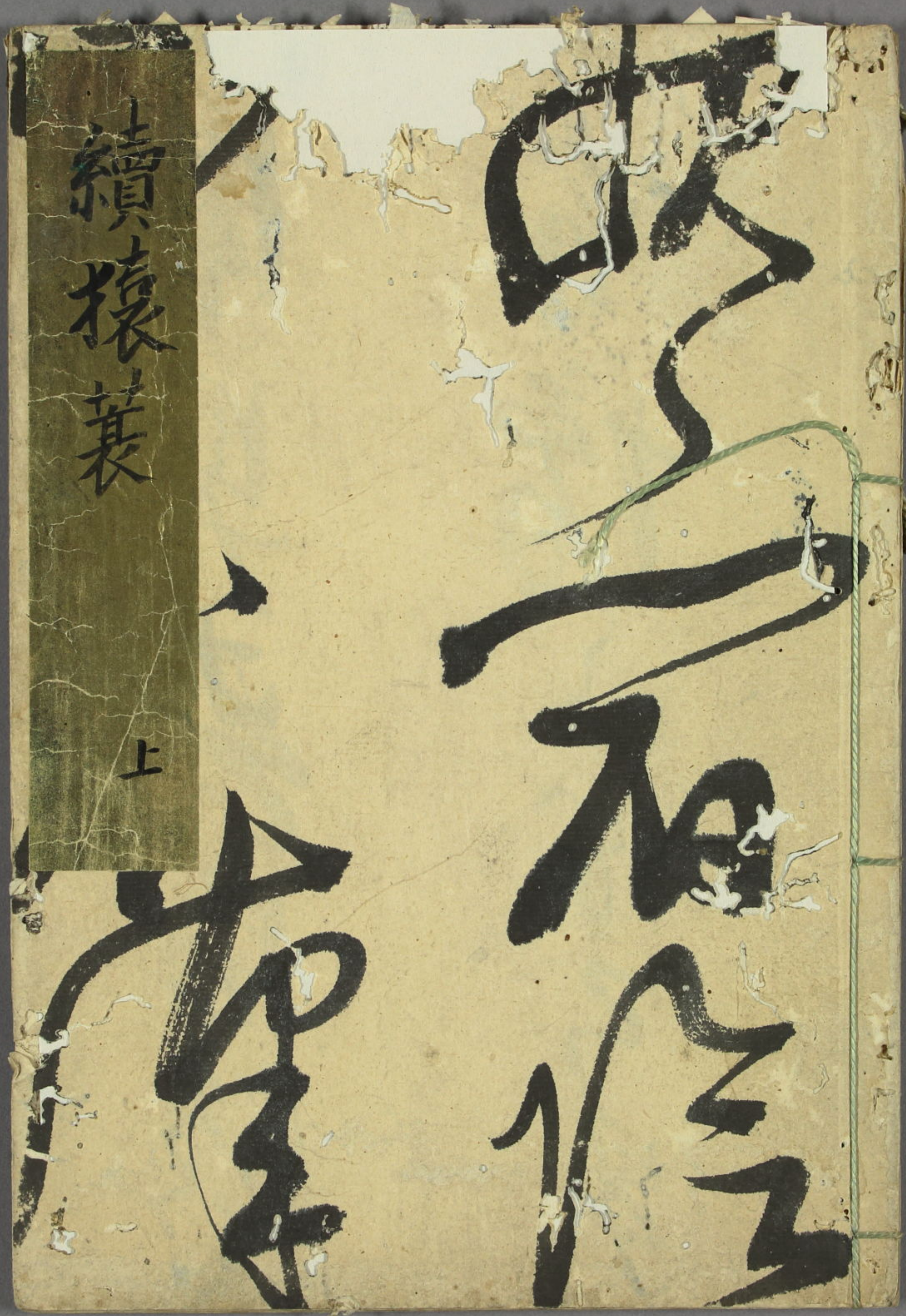




續猿蓑集卷之上

芭蕉

い九りゐてゐる板を
春のうすけ富あらし
ぬきとる馬もこのとけ羽織
内をききつゝ晩のぬき
まのふらふらあらし月のを
お脊のうれて肌をきき

沾圃

馬見

里圃

沾

蕉

流柿ももゝ風に吹れり
孫々跡とら祖父乃借涉
服指に帯てちる旅刀
煉を志歩をるや餅の暇
新米の小鳥一さけ賣にき
十里をるを此余所へ
母の墓に小海埋てあり
阿はゝつちを所の言つた

蕉 治 里 覓 治 蕉 覓 里

前々う海を海はなき増増と
やつちすちる京のちつれ
海はよあちる死のちあひて
見るのちるちるねのちくは
春やあちるあれた作ち
伊勢の下田に居つちる
ち持よ小拳此仲りそち
くつちるちるのちるちる

蕉 治 里 覓 治 蕉 覓 里

禪寺に一日あそふ砂のと
櫛の角うそてぬき穴
溪やの半に傍とそそや
なれぬ娘みきう守り控
月待は侍まゐのうらそひ
雛の菊はみきうほし
里れてきてあそびも
侍傍うらそひわら

里 覓 蕉 沓 覓 里 沾 蕉

削やにきり坂のみの風
あそびに里のうらそひ
引立ててあそびに里のうらそひ
そとと火入よあそび
花をそととあそびに里のうらそひ
潮かーらのあそびに里のうらそひ

里 覓 蕉 沓 覓 里

馬寛

雀^{カラ}の字やあふてほろものあ

てりまふの岸のおりる月

ま家をきてふれえ秋葉で

細川しなる水のそく申酒

衆をうらまひるもみく

庭をふいてふの洗足

治圃

里圃

光

祐

里

悔さるるふの一步のえとを
信地をんてまゐるなり
あまのうたふのうたふ
うたふのうたふ
うたふのうたふ
うたふのうたふ
うたふのうたふ
うたふのうたふ

范 治 里 范 治 里 范 治 里 范 治 里

明らるる伊勢のうたふ
葉をうたふのうたふ
信地をんてまゐるなり
あまのうたふのうたふ
うたふのうたふ
うたふのうたふ
うたふのうたふ
うたふのうたふ

范 治 里 范 治 里 范 治 里 范 治 里

けのまゝよるる花子のあまて
あゝいまをまじりてと家
にに寺の指圖をあらわし
庵のあまのあまをみせし
陸よりてあゝあゝあゝ
早下りてあゝあゝあゝ
肌入て秋にけりあゝあゝ
顔よあゝあゝあゝあゝ

里 泊 覓 里 泊 覓 里 泊 覓

いゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝ

里 泊 覓 里 泊 覓 里 泊 覓

あつちとあつちと
町切は月見の集あつち
上と下とにわかれ
大根のそとにわかれ
みのおとにわかれ
あつちとあつちと

里園
芭蕉
馬見
佑
里

知恩院の参り此等極りて
けく此後を概わやく
担の極みあるをけなし
月利て家老よみきなり
此等を駿河の飛脚傳より
あこせしめきなりぬりの程
軍のきよとあり此の地ちり
伊勢新つふ綿とりのぬ

佐 寛 里 佐 寛 里 佐 寛

うき様を略とつれ立派のき
き明きき明ききききき
某舟のたの中よりけりて
板の傍へ門をききききり
百姓となりてききききき
くお免を膳とありききき
きおの滋強ききききき
りあのおききききききき

佐 寛 里 佐 寛 里 佐 寛

砂をきく藤の中へ路^{ギル}緑の
ふをくひひあをそ 江
大燈の火いけて橋^{カキ}手^{カキ}我^{カキ}志^{カキ}川^{カキ}
一ふ^{カキ}海^{カキ}〜 唯^{カキ}り^{カキ}来^{カキ}
折^{カキ}しを案^{カキ}同^{カキ}の起^{カキ}る^{カキ}ま^{カキ}
仰^{カキ}に^{カキ}加^{カキ}減^{カキ}り^{カキ}ち^{カキ}ふ^{カキ}お^{カキ}き^{カキ}
月^{カキ}影^{カキ}よ^{カキ}こ^{カキ}〜^{カキ}い^{カキ}め^{カキ}を^{カキ}さ^{カキ}は^{カキ}あ^{カキ}て^{カキ}
おもひのまに^{カキ}あ^{カキ}綿^{カキ}て^{カキ}る^{カキ}根^{カキ}

里 治 克 里 治 克 里 治

も拂^{カキ}ふ娘^{カキ}を^{カキ}や^{カキ}い^{カキ}て^{カキ}娘^{カキ}の^{カキ}さ^{カキ}こ^{カキ}
〜あ^{カキ}ふ^{カキ}ふ^{カキ}の^{カキ}ふ^{カキ}を^{カキ}さ^{カキ}ら^{カキ}て^{カキ}は^{カキ}さ^{カキ}ら^{カキ}
た^{カキ}の^{カキ}あ^{カキ}と^{カキ}躑^{カキ}躑^{カキ}の^{カキ}さ^{カキ}ら^{カキ}は^{カキ}り^{カキ}
寺^{カキ}の^{カキ}い^{カキ}け^{カキ}さ^{カキ}ら^{カキ}は^{カキ}の^{カキ}ま^{カキ}ち^{カキ}
あ^{カキ}ふ^{カキ}り^{カキ}さ^{カキ}ら^{カキ}ち^{カキ}〜^{カキ}あ^{カキ}ふ^{カキ}り^{カキ}の^{カキ}鴨^{カキ}
一^{カキ}ふ^{カキ}降^{カキ}て^{カキ}あ^{カキ}〜^{カキ}あ^{カキ}凡^{カキ}

里 治 克 里 治 克 里 治

猿蓑にぬれたる衣の松露不
々々々々々々々々々々々々々々々
水々々々の中よりたありて
篠竹より海草をいれ
鶏々あうややうてまの月
あつと死なさんん世々々々

江團

芭蕉
又考
惟然
蕉
考

ふとふといふてふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふと
中国よりの状のふとふと
朝りの日さささやふとふと
一さふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふと

然考蕉然考蕉然考蕉然考蕉

ふとふといふてふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふと
中国よりの状のふとふと
朝りの日さささやふとふと
一さふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふと

然考蕉然考蕉然考蕉然考蕉

大甘いなむうふふふふの陸
雪うきふー中のふふを
まうねのふ掛る皆ふふふ
奥の世ふふふふの作
酒ふりも青のふふふ月見て
赤鶴頭をふふふ西面
まうね娘のふふふふふ
床汗のふふふふふふ

蕉 然 老 然 蕉 考

ふふふふふふふふふ
大ふつふふのふふふふ
ふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふ
鴨の油のふふふふふ

然 蕉 考 蕉 然 考

今宵賦

師盤子
支考

今宵六月十六日の雨あまやかむ月ハ
東風の乱ふかけて衣裳の潮風の秋
をぬくむされきと宵の何なるか
尊卑の席をくらふとてあはく敷て
~~~~~  
次人そこしよ涼とて野に里  
はらけおふきぬしかりたは人さく  
さしに人をぬきし免むとてあは福を

ちとちと糸のめくも我もふくめは唯降  
 ぶるよきさうじふの面をさへあるき  
 こそを語りけり所雲、深川の草屋より  
 ものまねとてこゝろにさるる月  
 きつきのあはれを語りて伊賀のさ中り  
 父母の古墳をさへい洛の嵯峨に  
 旅新て哭けり祇園の凍<sup>こ</sup>りぬきよ  
 川原かそやけらぬ秋をまてれりやと

ちよとさすか 湖の細路も ことごとく  
 そとに 四里の思を 遠く 雲と草鞋の  
 駕を せしめ 舟の 暮れ 中を あり  
 ごとく 傳あり 俗より 俗より 傳ふ 似る  
 もの 何と どの 交の あり 記の 名 妙川の  
 岸は 中ねを せしめ ことごとく 原より 傳ふ  
 ことごとく 伝あり 味なり して 人あり あり  
 あり あり あり あり あり あり あり あり  
 あり あり あり あり あり あり あり あり

ろろろを人の聲うひてある一匹鶴  
啼て月もかゝるより海やうして夢寐  
比き何事もなきものの方と云ふ  
されしを又去る心持の方と云ふ  
來て財富の比きあふ事なにもあめなり  
ろろろを湖のあふるのやうにろろろと云  
わうれていつうけあひあるろろろと云ふ  
のそをそを最のろろろと云ふ  
ら次々智の具宴何と云ふろろろと云ふ

ろろろは酔て移るものあつて爵盃の歌  
あつてそのおまんこたもあつてあひね

芭蕉

故  
あのおや酔て明しつてあ  
露そろろろと云ふ蓮の根先  
常いづらの花もあつて入て  
ちきり華籠る及切あつて  
月影の雪もあつて雪の色  
あつて張をろろろ加馬がよ  
芭蕉

糞を枵場の如く追ふか  
 山々々々々々々々々々々々  
 飯糰をうす面桶をうすむた打豫  
 寫てうまをささるる照降  
 おれうす奇の流るる橋の敷  
 持仰のうすの夕日さ  
 平睦の葉を荷立  
 秋風うすう門の左風呂  
 然考翠蕉考然

馬引て賑ひぬる月の影  
 尻絶てつきしものゑな  
 歸好のことしれぬあうれて  
 四月ものく襟もよこさ次  
 春風は善徳のほもとさ次や  
 藤々々村人ぬけらうる  
 喰ふぬ智も男も口をいて  
 何えの時を山休よりうら  
 蕉考然考然考然

世に心を付くをこそ  
 蕨といふや仲月  
 おおぞ跡先なる川  
 際の日も雪の氣を  
 吞みこみ酒の引  
 忌かえのふを  
 封付し文を  
 くらしありく  
 蕉  
 然  
 夢  
 手

雲龍つる四糸の角の何糸所  
 高橋子あつる表 一圓  
 今のはしをえうく次橋の上  
 大なる橋のどんとすゆら  
 雲ちる高きも龍およそて  
 腰けつる 高橋の下  
 然 翠 高

大正  
四年

張氏